

熊野

— 中上健次の小説世界の史的解析の試み —

西尾 一知衛
愛知学泉短期大学

Kumano

— Historical Analysis on the Background of Kenji Nakagami's Fictitious World: An Essay —

Kazuchiei Nishio

キーワード： 熊野三山 the Three Shrines of Kumano、 他界観 Ideas of
the Other World、 被差別民 discriminated people

1. 中上健次の小説世界と熊野

中上健次の創り出した小説世界の特異さについては、すでに何人かの文学評論家が論じている。その一人、吉本隆明は、それを、古典近代的な世界像に「深くかかわるために」仮構された、「古代的あるいはアジア的な世界¹⁾」だと指摘する。吉本が「古代的あるいはアジア的世界」と言うのは、「古典近代的な世界」を創り出した西欧の論理的・分析的（＝科学的）思考とは異なる思惟・精神に導かれた世界の謂である。

そこでは、現在が過去と交錯し、生者が死者にとらえられたり、死者の生を生きたりする。またそこは、本能や血統に突き動かされて生きる者の前で、正邪善悪の規矩たる倫理道德の意義が霧消していく世界である。

主人公たちは、盗みや賭博といった小悪事や動物的な情事にふけり、刃傷沙汰の結果だったり、突然の厭世に襲われ首をくくったりして、卑小な死を死ぬ。だが、その卑小な死が「悲劇的」であったり「崇高」であったりする（吉本）のは、「貴種中本の血統」を絶やそうとする、個

人の意思を翻弄する圧倒的な外部の意志（運命であったり、血であったり、因果であったりする）の働きの結果としての死だからである。

中上が『千年の愉楽』や『枯木灘』の舞台として作り上げた小説世界は、背後に分厚く重い現実性を持って読者に迫る。この理由は、中上が舞台を熊野に設定していることに多くを負っていると思う。

「根国」や「黄泉国」として『記紀』に書かれ、『万葉集』では「隠国（こもりく）」とも表わされた「死者の国」。他界とか死者の魂とかにかかわる、古代以来の日本人の原宗教的想像力が凝縮されているのが熊野である。出雲が、大国主命の国譲り神話などで大和の政治に絡み取られたのに対し、熊野は日本人の原宗教的聖地であり続けた。

日本の古代信仰に仏教や神道、さらに修験道が入り組んだ聖地熊野。その混沌が、中上健次の小説世界に、現実感を、厚みと重さを、与えている。その混沌を、手の届く個所から解きほごそうというのが、本編の狙いである。

2. 『記紀』のなかの熊野

『古事記』に、伊邪那岐・伊邪那美が国生みを終えて、次いで神々を生んだとき、伊邪那美は「火の神を生みしに因りて、遂に神避り坐しき」とある。その個所にかんして、『古事記』は「其の神避りし伊邪那美神は、出雲国と伯伎国との堺の比婆の山（場所未詳一注）に葬りき」と記すが、『日本書紀』は「一書に曰はく、伊奘冉尊（いざなみのみこと）、火神を生む時に、灼かれて神退去りましぬ。故、紀伊国の熊野の有馬村に葬りまつる。土俗（くにひと）、此の神の魂を祭るには、花の時には亦花を以て祭る。又鼓吹（ふえ）幡旗を用て、歌ひ舞ひて祭る」との異伝を載せる。

熊野は、歴史的には紀伊半島南部、紀伊・伊勢両国にまたがる牟婁（むろ）地方の総称である。『書紀』にいう「紀伊国の熊野の有馬村」は、現在の三重県熊野市で、有馬町に「花の窟（はなのいわや）」という、高さ70メートルにおよぶ巨岩を御神体とする神社があり、伊邪那美神の被葬地とされ、その御魂を祭っている。

次に熊野が『記紀』に現れるのが、よく知られた神武東征の記事である。大和に入らんとして「日神の御子」であるのに「日に向ひて」戦ったため神武の兄である五瀬命が傷を負う。「背に日を負ひて撃」つため「南の方より廻り」行かんとして紀国に到る。五瀬命はそこで崩じて紀国竈山に葬られる。神武天皇は熊野村に到り、そこから「八咫鳥」に導かれて吉野へ出て、大和を平定する。

『古事記』には「熊野山之荒神」といい、また神武が熊野山中を吉野へ向かうとき「荒神甚多」のゆえに、天照大神は「八咫鳥」をつかわし神武に安全な道をゆかせた。『古事記』の記述はこのように簡略であるが、『書紀』の記事はもっと詳しい。

「荒神」とは熊野土着の、天つ神の御子に「伏はぬ（まつろはぬ）」神々である。『書紀』に、熊野に入らんとして名草邑に至り「則ち名草戸畔（なくさとべ）といふ者を誅（ころ）す、」また、丹敷浦に至りて「因りて丹敷戸畔（にしきとべ）といふ者を誅（ころ）す」との記載が見える。誅す前には、いずれの場合も神武の兄たちが命を失っている。名草戸畔を誅す前の記事

は五瀬命が矢傷がもとで死んだことに関するものであるし、丹敷戸畔を誅す記事は、稲飯命と三毛入野命が海上での暴風を鎮めるため入水した記事に続く。トベは、トジが男性の家長一戸主であるのに対し、家の主婦を謂うと注にあるが、『書紀』のこの記事においては、トベはその土地の神に仕える巫女だったと思う。

白川静によれば、中国古代において、異族への呪儀として「望」が行われた。「望」は「わが国で国見といわれるものである。」「望という字は、遠くを望み見る呪儀を示す象形字である。それは見るという、眼の呪力に訴える行為であった。見ることは、その対象にはたらきかけるという力があると、考えられていたのである。」望の儀礼の方法には「眉人三千をして・・・苦方を望ましむる」というものがあつた。「眉人とは媚女のことである。媚は呪術を行う巫女が、呪飾を加えている姿である。戦争の時には、この媚女たちが軍の先頭に立ち、あるいは鼓を鳴らして、敵に呪的な攻撃を加えた・・・それで戦争が終わると、敗れた方の媚女たちは、その魔術的な力を失わせるために、すべて殺された。」トベを誅したのは、天つ神の御子たちを神避らせた熊野の荒神の巫女を殺したのである。

神武の「郷導（くにのみちびき）」として天つ神より遣わされた「八咫鳥」については、多くの解釈が可能である。歴史民俗学は、古代海洋民族にとって、鳥は陸地の方角を教える役を務めたと指摘する。遠洋航海には必ず鳥を携行し、陸地を見失ったとき携行した鳥を放ち、その飛び去る方向に陸地のあることを知ったという。導きの鳥である。仏教民俗学の五来重は、熊野では風葬の慣習によって、カラスが靈魂の去来する姿と見られるようになり、ついには神聖視されて神使とされたことが背景にあり、それがカラスを神武の嚮導者にしたと解釈する。

「八咫鳥」は3本足と伝承されるが、『記紀』にはそのような記述はない。中世以降、熊野三山にたいする信仰が盛んになり、熊野社で配布した牛王護符には、カラスの絵で図案化された「熊野牛王宝印」の文字が木版で印刷された。そのころから神鳥八咫鳥の威を高めるため、3本足とされたのではないか。3本足のカラスは『淮南子』（前2世紀に成る）に「日の中に跋鳥

(しゅんう)有り³⁾との記載が見え、これが、太陽の中にいるという3本足のカラスである。白川静の『字通』は、「跋」の字義の一つに「3本足」を載せる。そして、「跋鳥」を「3本足の鳥」として、前掲の『淮南子』の節を引く。

副葬品として工芸品や、帛書、帛画が見つかり、中国古代史研究に貴重な資料を提供した「馬王堆漢墓」は前2世紀の墳墓で、発掘は1970年代前半におこなわれた。出土した副葬品の一つに、内棺の蓋にかけられた帛画があり、その画の天上界を表わす部分に、太陽の中にいるカラスが描かれている(2本足のように見えるが)。日の神が遣わしたカラスということで、八咫鳥を「日の中の跋鳥」と重ね、3本足にしたということは想像するに難くない。

3. 死者の国—「常世国」「隠り国」「根の国」「黄泉国」—

死者の国・死者の魂の赴く国には上にあげたようなさまざまな名があり、それぞれ、異なる民俗の文化を背景に持つように思われる。黄泉は中国で地下の泉のことで、黄泉国は地底にあると考えられており、中国の民俗文化の影響を受けた他界観といわれる。これに対し、常世は南方から来た民族がもたらした他界観とされ、死者の霊が帰る、海のかなたの理想郷と考えられた。根の国は「底根国」とか「根の堅州国」とか書かれて地底の国と考える見方と、根本の意を表すとして、本貫の地、現世の人間がそこから来た母の国の意味だとする見方がある。柳田国男は後者の立場で、海のかなたの他界と考えている⁴⁾。

隠り国は『万葉集』では大和の泊瀬(はつせ、泊は初とも書かれる)国の枕詞であるが、こもるは「幽冥に隠るる意」で泊瀬は「埋葬の地」であった(『大言海』)。ここにもう一つの他界観、つまり死者の霊は清浄になり山岳に昇るという山岳他界の考えがある。熊野信仰はここに発する。熊野は「宗教学的にいえば、死者の靈魂のあつまる他界信仰の霊場⁵⁾」であった。熊野という地名は出雲にもあり、「くま」は「くまで」

「くまど」「くまじ」など、死者の靈魂の隠(こも)るところの意味で、「冥土の古語である。」日本古代の山岳信仰と神道、それに最澄や空海がもたらした仏教の山林修行の思想が混然一体となり、吉野・熊野は修験道の修行場ともなった。山岳他界で過酷な修行を積み呪的な法力を体得せんとするのである。

中世に浄土教が広まると、死者の国・熊野は仏教の浄土とみなされるようになる。すべての死者の霊が赴くという古代信仰の聖地は、修行も善行も問わず、ただ阿弥陀や観音の慈悲によって万人の往生がかなうと説く浄土教の浄土と、齟齬なく重なったのである。熊野三山に阿弥陀如来が来迎することを信じた人々は、「蟻の熊野詣」といわれるほど、列をなして熊野に詣でた。山岳浄土の信仰は、鎌倉時代に描かれた、日本独特の山越阿弥陀図に表れている。熊野詣は上下貴賤を問わず、時代の強迫観念になったかのごとき様相を呈する。院政期から熊野を詣でた上皇や法皇をあげれば、宇多法皇一度、花山法皇一度、白河上皇九度、鳥羽上皇二十一度、崇徳上皇一度、後白河上皇三十四度、後鳥羽上皇二十八度、後嵯峨上皇二度、龜山上皇一度というふうである。

山越阿弥陀図で、山越に現れた阿弥陀仏の背景は海である。山岳も浄土なら、海の彼方の理想郷、常世も浄土に重なった。中世熊野では「補陀落(ふだらく)渡海」といわれる捨身行が実践された。鎌倉初期の念仏者たちの法語を集めた『一言芳談抄』の「念死」の章には「つねに此身をいとひにくみて、死をもねがふ意樂をこのむべきなり」とか「とく死なばや」といった激越な浄土願生者の言葉が記されている。補陀落山は、華嚴経に善財童子が観世音菩薩に面謁したとされるインド南海岸のPotalaka山のことだと考えられている。観世音菩薩の住处とされ、日本や中国で観音霊場とされるところに、しばしば補陀落にちなんだ名がつけられた。揚子江河口に近い舟山群島の普陀(ふだ)山・洛迦(らか)山がそうである。日本では二荒山(ふたらさん)などがあるが、第一の観音霊場は那智山であった。

補陀落渡海は、海の向こうにあると信ぜられた補陀落浄土に往かんと願う仏教者が、那智山

や大滝を望む海辺から、入水したか船に乗って海に出た捨身という自死行為である。この渡海船は那智大社所蔵の「熊野那智参詣曼荼羅」に描かれている。屋形船で中央に帆があり、屋形の四方に鳥居が据えられ、その間を忌垣が囲む。五来重は、この船の体裁は日本の葬制の常識からいえば「もがり」で、墓の構造を示しており、死者を収めた船を湾外まで曳航し熊野灘に放った水葬であろうと解釈する⁹⁾。補陀落渡海が入水往生であれ水葬であれ、「補陀落」が「常世郷」とつながっていることは感得される。聖地熊野の神秘性を深める、他界観念の重層構造がここにもみられる。

4. 山人の生活

紀伊半島を地図で見ると、山塊が海岸線に迫り、平野が広がるのは、主に半島の付け根の部分——伊勢湾に面した四日市・津・松阪の一带と大阪湾に面した大阪平野——で、それ以外の、海に突き出た半島部で平野と認められるのは、紀ノ川の河口部にあたる和歌山市くらいである。このような地形では、人々は山に頼って生計を立てることになる。山人の生業といえば、まず思い浮かべるのは狩猟と樵である。

『記紀』には、吉野に出たのち神武を助けたと思われる二人の「尾生（あ）る人」の記事がある。それぞれ吉野首部と吉野国巢部の始祖である国つ神だと記す。尾があるというのは、毛皮などをまとった外見の特徴をそう言ったのであろうと考えられている。尾ある国つ神とは、山にくらす人々の集落の長であったのであろう。

12世紀に成ったとされる『粉河寺縁起』絵巻は、粉河寺（和歌山県那賀郡粉河町）の草創は奈良朝末期、紀伊の国那賀郡の獵師大伴孔子古（おおとものくじこ）の発願によると記す。そして絵巻からは獵師孔子古の生活がよくわかる。鹿の通り道の木の枝に数本の丸太を並べてしばりつけ、そこで弓矢を持って獲物を待つ孔子古。この足場用の棚を「踞木（いざりぎ）」と言った。家での食事風景も描かれ、そこでは切り分けられた肉の乗るまな板の前に孔子古が座り、その傍らで子どもが串に刺した肉を食べている。庭

には薪が転がり、そのそばで鍋が火にかけられていて、串刺しの肉がその周りにあるから、肉は炙るか煮るかして食されたのであろう。筵の上に大ぶりの肉塊が並べられて干されている。木枠に広げられた鹿皮が柴垣に立てかけて干してある。その脇で犬が与えられた肉片を食べている。犬は獵犬で、鹿や猪を追い立てたのであろう。後に描かれる河内の国の長者の豪邸とは比べ物にならないが、それでも孔子古が自立した生計を営んでいるのがわかる⁷⁾。

民俗学者の宮本常一によれば、吉野や熊野は古くから狩猟で生活を立てていた村の多いところであったが、農耕の発展にともない解体していき、農耕に転ずるものと、四散して個々に旧来の生活を続けるものになったという。『今昔物語』などに収録されている、山道に迷った旅人が山中の一軒家や草庵に宿を借りると家の者が獣の肉を食していたという話は、後者の例であろうという。

「狩猟を生業とする者の群が解体して、一人一人がそれぞれはなればなれに、しかも一般民衆とも接触を避けて生活していたことが推定される。一人一人で狩猟をおこなうならば鳥獣の肉によってもなお生活をたてることができたのであろうが、そうした狩人たちはまた・・・山をこえる旅人の道案内、あるいは一般旅人の警護なども引き受けていたのではないかと思われる⁸⁾。」

鈴木牧之が著した『北越雪譜』二編卷之四に「異獣」の民間伝承が収録されている⁹⁾。この異獣、外見は「猿に似て猿にもあらず。頭の毛長く背にたれたるが半ばはしろし、丈は常並の人よりたかく、顔は猿に似て赤からず、眼大にして光りあり」という。この異獣が旅人の飯を指して、くれよとしぐさで訴える。飯を与えると、旅人の大きな荷を軽々と背負い、目的地近くの村まで山中の険阻な道を案内し、荷を下ろすと、風のごとく山に消えたという。「今より四五十年以前の事なり」とあって、牧之が雪国の人々の生活の実態や伝承を集め著述し始めたのは1800年頃であるから、この体験を語った荷役が「異獣」と遭遇したのは18世紀半ばとなる。牧之はまた、「秋山紀行」でマタギたちの山中での生活を描いているが、牧之が秋山温泉

で話を聞いたマタギの風貌が、この異獣と重なるのである。秋田の城下から三里ほど離れた山里に住むこのマタギは、山中の道を上州草津まで赴き、イワナが大量に取れば草津の湯へ持って行って売り、鹿や熊を取れば皮をはぎ、肉は塩漬けにして、やはり草津へ持っていく。山小屋での生活には米と塩を持っていくが、20日も30日も暮らすと米は不足し、取った魚や獣肉を食べるが、食い飽いてしまうという¹⁰⁾。

握り飯をほしがり、また、台所の飯櫃を指さして「欲しきさま」をし、与えればその人に役立つことをして去る異獣伝説は、「一般民衆とも接触を避け」「一人一人で狩猟をおこなう」、魚や獣肉に飽いたマタギとの遭遇譚が形を変えたのだと思われる。熊野の猟師も同様の生活をしてきたと考えてよい。留意すべきは、「異獣」の伝承の背後にある、町人や里で農耕を営む人々が、山人に対して抱くようになった一種の怖れの念である。

吉野や熊野は材木を伐り出す杣の仕事に従事する者も多かった。宮本常一によれば、伐り出した木材の「流送に便利な河川の上中流流域で林業は発達した」。代表的地域として、氏はまず「大和吉野山中」をあげる。「この山地は南へは北山川・熊野川が流れ、新宮で海にはいっており、西へは紀ノ川が流れて和歌山の北で海にはいっている。この二つの川は筏の流送のためにじつによく利用せられたのである。¹¹⁾」奈良時代以降、都城の建設や寺社の建立が地方でも盛んになると、技術を持った杣人たちは集団で地方に出かけ、その地の山林で働いた。熊野の杣人が出向いたという口碑を持つところをあげると「北は能代川流域、真室川付近、南は四国の阿波・土佐の山中、さらに鹿児島県の屋久島にもおよんでいる。¹²⁾」つまり、北海道を除く日本全土にわたるといふことで、大木を伐り出す熊野の杣人の技術が高かったのであろう¹³⁾。日本の多くの山中にみられる熊野権現の祠は、他郷の山奥に出かけて大木を伐る熊野の杣人が、土地の神の怒りに触れて禍を蒙らぬよう、熊野の神の加護を願って建てたのではないかといわれる。

山に住む人の中には、狭い平地を切り開いた定畑や焼畑耕作によってアワ・ヒユ・ソバを作

る者もいた。得られる雑穀だけでは生活ができないので、様々な副業をしたが、木地屋や木工に関係する仕事が多かった。木地屋にはろくろを使って椀や盆を作る者と、杓子などを作る者がいた。木地そのままでは椀や盆は壊れやすいので、椀木地屋は漆掻きや塗師と結びついた。紀伊には黒江塗がある。曲物も作られた。檜を薄い板に剥いで、曲げて丸くし、桜の皮などで綴じて、底をつけ桶にした。竹を使った籠や箕、篩なども作られた。炭焼きも盛んに行われ、海上輸送が発達すると熊野は大阪へ木炭を供給するようになった。熊野に詣でる人々の荷持ちや道案内をする者もいた。

山中の狭い畑耕作では生活がなりゆかぬから、上にあげたような仕事をする。そこで作ったものは里へ行って売らなくてはならない。つまり、行商を兼ねることになる。他郷に出稼ぎに行く者もいた。里に下り農業を営もうとしても余剰の農地などない。漁業に就こうにも新参者に割り振れる漁場などない。山人は、貧しくつらくとも、山に棲み山で稼ぐしかなかった。

5. 被差別民の「路地」

「昔まだ男衆らがまともな職につこうにも職がなく屈強の者は山の木馬引き、手先の器用なものなら下駄や草履の直しをしに路地の山の頂上にある門を通過して城下町の方へ降りて御一新で花街になった屋敷跡に車をひいて行くか、路地の蓮池近辺にわき出る清水を利用しての獣のなめしをするしかなく、博奕、盗人、スリが男らの茶飯事としてあった時・・・」

— 中上健次 『千年の愉楽』 —

中上の小説世界は熊野の(『千年の愉楽』では新宮の)「路地」を舞台としている。「路地」とは被差別部落のことである。『版籍取調帳』によれば「明治二年新宮藩戸口ノ数」は54,679人、うち士族1,905人、平民50,220人、「穢多」759人(179戸)である。被差別部落の起源については書かれたものは残っていないが、浜松藩主水野重央が新宮藩主として転封した際、皮革職人や処刑人を帯同して、彼らの多くが春日に住

んだと伝わる¹⁴⁾。皮革職人とは、皮をなめし、武器や馬具の皮革細工をした職能民である。1918(大正7)年の内務省の調査によれば、旧新宮町那智村の被差別部落の職業は、日稼ぎ345人、下駄直し157人、古物商77人、牛馬商74人、履物製造58人、鶏商・行商44人などが主である。皮革商・細工製造は2戸10人であった。

新宮は江戸時代には材木業で繁栄し、近代に入ると製紙会社のパルプ工場が集まり、外材が輸入され出す1950年代までは原木取引・製材も盛んで、紀伊半島一帯から人が集まった。「金が欲しかったら、一尺でも川を下れ¹⁵⁾」と言われ、山人たちが新宮に入ってきた。彼らは旧城下町には住めず、臥龍山(高さ30メートルほどの丘、削られて今はない)を挟んだ反対側の新開地に集まった。章の初めに引いた「路地の山の頂上にある門を通過して城下町の方へ降りて・・・」という山は臥龍山のことである。山人への怖れの念、貧しく、細工物の行商で生計を立てる人への侮り、穢れと結びついた生業への忌避などが差別の背景にある。

中上はなぜ小説の舞台に熊野の「路地」を持ってきたのか。自分の出身地・出自へのこだわりもあろうが、それ以上にその出身地・出自のもつ、中上にとっては普遍的であり現代的な、意味への思い入れがある。

熊野は生と死の交錯する聖地であった。しかも、山岳他界、常世、黄泉、浄土といった時間的には古代から中世・近世、宗教思想的には日本の土着宗教から中国の他界観や神仙思想、仏教というように、時間的厚みの中に、生死についての日本人の心性(メンタリティ)が幾層にも重なって現れる特異な場である。日本人の魂の問題を歴史の中で考えようとするとき、ここに勝る場所はない、と中上は考えているように思われる。

生と死に対する考えは聖と賤の観念に結びつく。『記紀』が示すのは、死や死に結びついたものは穢れであり悪であるという観念である。聖なる天皇を中心とする古代王朝体制や社寺を組織した宗教・祭祀制度は、その聖性を守るため穢れに携わる職能民を従属民として取り込んだ。王朝体制が崩壊し、聖への奉仕という外被を失

ってこれら職能民が賤民視され始めたというのが、差別の起源に関する網野善彦の見解である¹⁶⁾。

被差別民は、中上にとってはかつて聖に奉仕した者たち、あるいは時の権力者に反抗し敗れて身を落とした者たち(たとえば一向一揆で敗れた雑賀衆)の末裔であった。差別されることから生まれる卑下の感情と、聖や高貴につながる出自の意識が生む誇り、差別する社会への反感と憧れ、世間の常識や道徳の埒外で営まれる生と性—こういう情念や欲望の渦巻く「路地」は、日本人の魂の物語を紡ぐのに絶好の舞台だと、中上は考えたと思う。

生と死、聖と賤の豊饒な土壌が厚く堆積した熊野の「路地」で織りなされる人間の生は、現代社会のメカニックでメタリックな舞台装置の中(そこでは死は生から排除され、平等が唱和される)で営まれる生を、なんと無機質なものに浮かび上がらせることか。冒頭に引いたが、吉本が中上は彼の小説世界を「古典近代的な世界に深く関わらせるために」仮構したと言ったのも、このことにちがいない。「路地」が逆に現代社会を不毛な荒野のように現前させるのだ。

引用文献

- 1) 吉本隆明著『マス・イメージ論』(福武書店、1984年)85頁
- 2) 白川静著『中国古代の文化』(講談社学術文庫、1979年)68-71頁
- 3) 『淮南子』巻第七「精神」篇
- 4) 柳田国男著「根の国の話」『海上の道』(岩波書店、1978年)所収
- 5) 五来重著『熊野詣』(講談社学術文庫、2004年)5頁
- 6) 同上、72頁
- 7) 『コンパクト版日本の絵巻5 粉河寺縁起』(中央公論社、1994年)
- 8) 宮本常一著『山に生きる人びと』(河出文庫、2011年)33頁
- 9) 『日本庶民生活資料集成第九巻』(三一書房)所収鈴木牧之編「北越雪譜」98頁
- 10) 「秋山紀行」は今回手にすることができず、この記述は、宮本常一 前掲書 37-42頁に拠った。
- 11) 宮本常一 前掲書 171頁

- 12) 同上 176-177 頁
- 13) 宮本常一著『生きていく民俗』（河出文庫、2012年）156-160 頁
- 14) 和賀正樹著『熊野・被差別ブルース』（現代書館、2010年）72 頁。本文で引いた「版籍取調帳」や内務省調査による細民職業別人数は、同書 73 頁および 129 頁の記載に拠った。
- 15) 同上 20 頁
- 16) 網野善彦著『日本の歴史を読みなおす』（筑摩書房、1991年）第三章「畏怖と賤視」